

# エゾシカをおいしく食べるための捕獲とは

明石信廣

## はじめに

エゾシカなど鳥獣による農林業被害が全国的に大きな問題になり、その対策として捕獲がすすめられています。近年、捕獲した野生鳥獣を食肉として利用しようという機運が高まってきました。食材として利用される野生鳥獣は「ジビエ」と呼ばれ、農林業被害などの問題をもたらすために駆除される「害獣」が新たな地域資源になる可能性があります。しかし、どんなエゾシカも捕獲すれば食肉として利用できるわけではなく、エゾシカを上質な食肉として利用するのに適した捕獲方法が求められています。森林でも、狩猟者にエゾシカを捕獲してもらうための林道除雪や、森林管理者による捕獲事業などが行われるようになってきましたが、捕獲個体を食肉として利用するには、さまざまな条件を満たすことが求められます。林業試験場が関わってきたエゾシカ捕獲の経験から、エゾシカを食肉として利用するための条件についてまとめました。

## エゾシカの有効活用状況

平成 28 年度の全国のシカ捕獲頭数は 579,300 頭（環境省）、北海道の集計では、平成 29 年度に捕獲されたエゾシカは 128,104 頭となっています。農林水産省の平成 29 年度野生鳥獣資源利用実態調査によると、食肉処理施設において利用されたエゾシカは 32,084 頭で、捕獲数の 25%でした（図-1）。全国で利用された頭数は 64,406 頭でしたから、他地域に比べて北海道では有効活用がすすんでいる地域であると言えます。利用されたのは食肉が 500t、ペットフードが 243t でした。このほか、北海道の調査によると、捕獲数のおよそ 4 割は自家消費されています。

北海道では、平成 18 年に「エゾシカ有効活用のガイドライン」と「エゾシカ衛生処理マニュアル」が策定され、毎月第 4 火曜日を「シカの日」として PR するなど、シカ肉の利用を推進してきました。平成 27 年には「エゾシカ衛生処理マニュアル」が改訂されるとともに、「エゾシカ肉処理施設認証制度」が創設され、安全安心なエゾシカ肉の提供と販路拡大がすすめられてきました。

一方、エゾシカの個体数管理に関する施策もすすめられ、エゾシカの推定生息数は平成 23 年頃をピークに減少傾向にあります。これは、農林業被害を軽減するという面では望ましいのですが、ジビエとして利用するエゾシカを入手しにくくなるということでもあります。

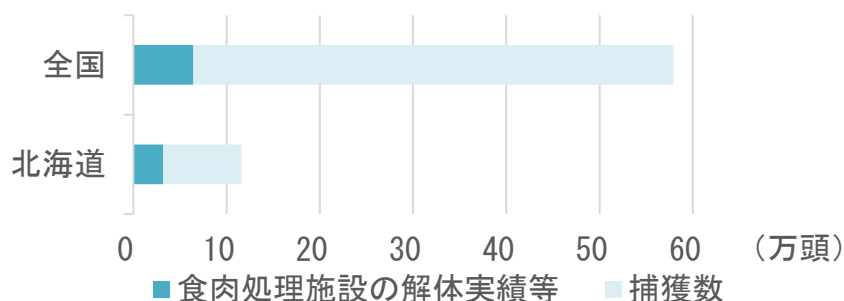


図-1 シカ捕獲数と食肉処理施設において利用された割合

資料：環境省の集計による捕獲数及び被害等の状況及び農林水産省の平成 29 年度野生鳥獣資源利用実態調査

### エゾシカの捕獲方法と時期

利用されたシカの捕獲方法として、北海道では銃器による捕獲が多くを占めていますが、北海道を除くとわな猟が主流です(図-2)。わな猟には、動物がわなを踏むことでワイヤーが締まるくくりわなや、ネットや板でできた囲いの中に動物を餌で誘引する囲いわななどがあります。

また、鳥獣の捕獲は、免許を受けた狩猟者が定められた時期に捕獲する「狩猟」と、有害鳥獣の駆除や学術研究を目的とした捕獲などの「許可捕獲」に分けられます。

エゾシカの狩猟期間は、「猟区」として独自の管理を行っている地域を除いて、10月から3月までの期間で地域ごとに定められています。このうち積雪期は、エゾシカにとって餌が乏しくなり、給餌による誘引がしやすくなります。しかし、積雪期は林道も多くが雪に閉ざされ、車両で捕獲に行くことが難しくなります。そこで、森林管理者が林道を除雪して狩猟者を誘導するなど、捕獲を推進する対策が取られてきました。

積雪のない時期には、通行できる林道は多いのですが、周囲に餌が豊富にある場合には、給餌による誘引が難しくなります。また、林業や山菜採りなど、さまざまな森林利用との調整を図って安全を確保する必要があります。

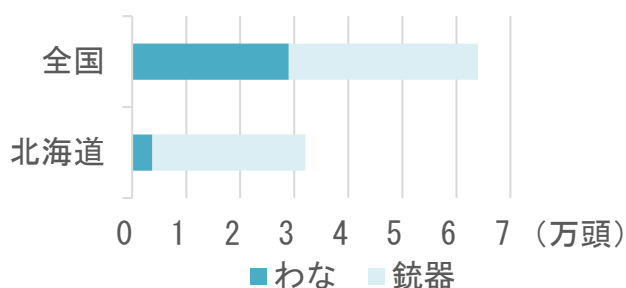


図-2 食肉処理施設において利用されたシカの捕獲方法  
資料：農林水産省の平成29年度野生鳥獣資源利用実態調査

### 銃器による捕獲～クリーンキルと速やかな処理

北海道では、ジビエとして利用されるエゾシカの多くは銃器によって捕獲されています。エゾシカ衛生処理マニュアルでは、食肉として利用するための狙撃部位を「胸部(横隔膜の前方、心臓、太い血管、肺などの部分)、可能であれば、頭(脳の部分)・頸椎(首の骨、脊髄の部分)」としています。急所を1発で撃つことはクリーンキルといわれ、動物を苦しめずに即死させることができます。また、このいずれかに当てる自信のない場合には「トリガーを引かない」、「腹部に着弾した個体は食用に供しない」としています。腹部に着弾して胃や腸を傷つけると、肉に臭いがつくほか、消化管内容物による微生物汚染の可能性があるのであります。

単に捕獲してエゾシカの数を減らすことが目的なら、腹部を撃つこともできます。しかし、食肉として利用するには、エゾシカの限られた部位を狙う必要があるということです。そのため、捕獲効率は低下する場合があります。エゾシカ捕獲を事業として実施する場合には、食肉としての利用を優先するかどうか、明確にしておく必要があります。

エゾシカ衛生処理マニュアルでは、捕獲後は極力短時間のうちに放血し、内臓は摘出せずに速やかに食肉処理施設に搬入することとされています。多くの施設では捕獲後2時間以内の搬入を求めています。捕獲したエゾシカを車両まで運んで積載し、林道から施設まで運搬することを考えると、2時間というのは短く、近隣に処理施設がなければ食用としての有効活用は困難です。そのため、道内の一部では、内臓摘出などの処理が可能な移動式解体処理車が利用されるようになっています。

海外では、野外での速やかな内臓摘出を薦めている国もありますが、そのためには、衛生管理の正確な知識と技術が必要になります(松浦ほか2015)。

このように、銃器によって捕獲したエゾシカの食用としての利用は、利用に適した捕獲場所、求められる技能を有する捕獲従事者、食肉処理施設が揃い、関係者が捕獲の目的を共有して初めて実現することができます。

### 囲いわなによる生体捕獲

北海道では、阿寒湖畔において平成16年度から大型囲いわなによるエゾシカ捕獲と地元事業者の一時養鹿による有効活用が始まりました(新井田・西田2007)。その後、各地でエゾシカ捕獲、一時養鹿を行う事業者が誕生し、囲いわなにもさまざまな工夫、改良が続けられてきました。

囲いわなによる捕獲の最大の利点は、エゾシカを生体で捕獲でき、施設において衛生的な処理が可能なこと。また、銃器による捕獲は日中に限られるのに対して、囲いわなは銃器を使う必要がないので、市街地周辺に出没するエゾシカや、夜間にしか出没时间の高い警戒心の高いエゾシカを捕獲することも可能です。一方、囲いわなの設置や運用、一時養鹿にはコストがかかるほか、一度設置すると容易には移設できず、事前の設置場所選定が重要になります。

現在、一度に数十頭を捕獲できる大型のものから、1~2頭を対象とした小型のもの(写真-1)まで、さまざまなタイプが使用されていますが、北海道ではシートや板で側面を覆うものが主流になっています。わなの中から外が見えないことは、エゾシカの警戒心を高めるのですが、捕獲されたエゾシカは外が見えると壁に体当たりして逃走しようとするため、損傷によって食肉に適さなくなったり、死亡したりすることがあります。北海道外では、外が見えるような囲いわなが主流ですが、食肉としての利用がすすむ北海道では、側面を覆うことは、捕獲効率を落としても良質な食肉を確保するための重要な要素と考えられています。

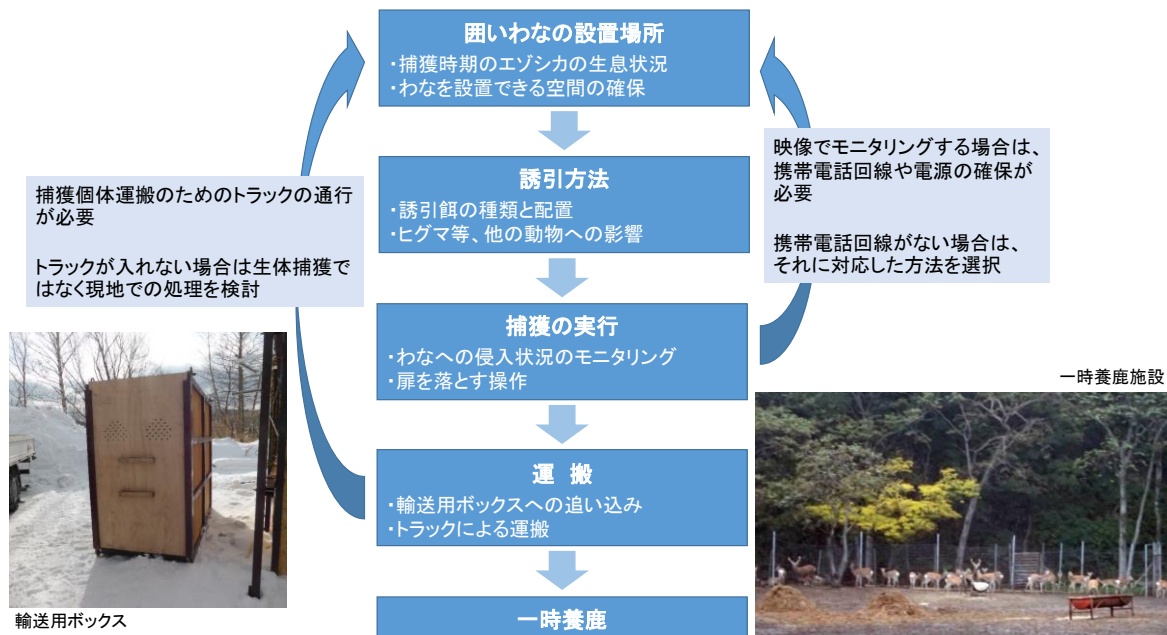
エゾシカのいそうな場所に囲いわなを設置したら、給餌によってわなの中にエゾシカを誘引します。誘引餌として、エゾシカの嗜好性が高く、エゾシカ以外の動物を誘引しないような餌を用いるのが理想です。餌の配置や量も、エゾシカの行動をよく考えて設置します。

わなにエゾシカが入ると、何らかの方法で入口を閉めなければなりません。物理的なトリガーとして扉につながるワイヤーを設置すると、捕獲できるのは1頭だけです。かつてはビデオカメラの映像を少し離れた場所で監視し、そこまで延ばしたワイヤーで扉を落とすこともあったそうです。最近では、携帯電話回線で映像を確認し、無線でトリガーを作動させる装置が市販されています。しかし、この装置の使用は携帯電話の電波の圏内に限られます。そこで、エゾシカの侵入、退出をセンサーで検知して設定頭数に達したら自動的に作動する装置や、侵入したエゾシカの体重によってトリガーを作動させる装置が市販されていますが、モニターがない場合は作動状況を確認に行く必要があります。多くの装置には電源が必要ですが、森林内ではソーラーパネルが使えない場合もあり、電源確保の手段を検討しなければなりません。



写真-1 北海道立総合研究機構環境科学研究センターが開発した体重計測式小型囲いわな

囲いわなの中に設置された体重計に設定された体重以上のエゾシカが乗ることでトリガーが作動し、入口が閉まる。設定によっては親子など複数の同時捕獲が可能。



図－3 罠いわなによるエゾシカの生体捕獲のために検討すべき項目の例

捕獲できたら、エゾシカを運搬ボックスに移動させ、トラックに積載して一時養鹿施設に搬入します。そのため、罠いわなの設置場所までトラックが走行できる場所でなければなりません。

このように、罠いわなによるエゾシカの生体捕獲は有効活用には望ましいのですが、多くの条件を満たす設置場所が必要です（図－3）。森林内の条件を熟知した森林管理者の協力が求められます。

### 農林業被害とエゾシカの有効活用

エゾシカを「おいしく食べるための捕獲手法」と「効率的に多く捕獲するための手法」は異なります。おいしく食べるには、捕獲方法にも配慮が必要で、捕獲効率が低下する場合があります。そのため、それぞれの地域において、農林業被害軽減のためにエゾシカを減らしたいのか、ジビエ活用のためにエゾシカを確保したいのか、方針を明確にする必要があります。

農林業被害の面からみるとエゾシカは少ない方が良く、エゾシカの効率的な捕獲が可能な生息密度では、広葉樹の天然更新は難しいと考えられます。一方、エゾシカを食肉として普及させるには安定供給が求められますが、すでに数年前に比べてエゾシカの捕獲が難しくなっているという声が聞かれます。そのため、目標とするエゾシカの生息密度も立場によって異なります。「エゾシカ有効活用のガイドライン」では、「供給量が大幅に不足していくことが予想される場合には、ブタやウシなどと同様に家畜的な飼育、いわゆる『完全養鹿』についても、検討することとする。」と記されています。

農林業被害軽減を目的としていても、エゾシカを捕獲したら、できるだけ有効活用をすすめたいものです。健全な森林に生息する低密度のエゾシカを、狩猟によって捕獲し、捕獲できた時にだけ食べられる地域資源として提供するような活用も考えられます。エゾシカの個体数の削減を目指していた時代を過ぎ、北海道における今後のエゾシカ管理のあり方が試される時期がきています。

(道北支場)

### 引用文献

松浦友紀子・伊吾田宏正・岡本匡代・伊吾田順平 (2015) 野外で内臓摘出したエゾシカ枝肉の衛生状況. 哺乳類科学 55: 11-20.

新井田利光・西田力博 (2007) 罠いワナを用いたエゾシカの捕獲. 北方林業 59: 97-100.